

東京⑦ 小笠原諸島探検と近代科学

江戸時代に小笠原諸島(以下、小笠原)の探検は数回にわたって実施され、地図製作学、本草学、そして近代自然科学が発達する機会となった。

小笠原の存在は、1670(寛文10)年頃漂流者により伝えられ、5年後に島谷市左衛門率いる探検隊によって確認された。島谷は、樹木やその種子、3種類の鳥などを含む発見物36件を幕府に提示したが、当時は開拓計画がなく、小笠原はその後も無人島のままであった。

1830年頃になると太平洋捕鯨ブームの影響により、西洋諸国や太平洋の島嶼出身の捕鯨者が小笠原に住み着き、農地の開拓を始めた。その過程で太平洋各地より動植物が持ち込まれ、孤島の生態系は大きく変化した。島民は頻繁に寄港する異国船に食料や薪水を販売して、密接な経済関係を築いた。1853(嘉永6)年に島を訪れたペリー(M. C. Perry)は、海軍基地の建設を米政府に進言した。

幕府も1862(文久2)年に、亜熱帯の植民地として小笠原の開拓に乗り出した。外国奉行水野忠徳に同行した阿部^{れきさい}樸齋などの本草学者たちは、島民の案内により動植物を調べた。新たに発見された品種を名付ける際に、樸齋たちは当地で使用されていた英語やハワイ語も用いた。幕府が小笠原領有を主張したのは、海防や外交上の戦略が主な目的であったが、異国的な農産物はやがて探検者たちの関心をひくようになった。オレンジやパイナップル、バナナなどの果物を絶賛した本草学者は、国内での試験栽培を幕府に提案し、入植者たちが持ち込んだ豚、鹿、鶏などの家畜化も試みた。島の野生の鶏について、「^{あに}豈島谷市左衛門等カ放テシ者ノ繁殖セルカ」(『小笠原島要録』1巻)と、小笠原と日本の歴史的関係を動物相の中で探る記述も見られる。

幕命により小笠原へ派遣された蒸気船咸臨丸は、各島や水深を測量した。艦長小野友五郎は月距法に堪能で、大海原に浮かぶ島々への航海に必要な能力を備えていた。小野の作成した地図【図】には日英2カ国語の地名が記載され、最新の測量技術



小野友五郎の地図：父島二見湾(小笠原村教育委員会蔵)

に基づくだけでなく、島民からの情報収集にもこの地図が活用されたことがうかがえる。

幕府は、海洋の経済的可能性をも模索して、咸臨丸に同乗した中浜万次郎を翌年、再び小笠原へ派遣した。万次郎は横浜で購入したスクーナー式捕鯨船で父島へ赴き、西洋式捕鯨を実験した。米国の捕鯨船で数年間働いた経験のある万次郎は、小笠原で元捕鯨者の島民を雇い、寄港した異国船から「ボンブランズ」(bomb lance と呼ばれる捕鯨銃)を購入し、クジラ2頭を捕獲した。しかし、開拓計画は1863(元久3)年に中止され、小笠原は無政府空間に戻った。

明治政府は1875(明治8)年に明治丸を派遣し、改めて小笠原の領有を宣言した。このとき、小笠原には田中芳男が蘭領ジャワから購入したキナの苗のほかに、甘蔗、オリーブ、綿などが実験的に植えられた。その実験の多くは不成功だったが、早くも1877(同10)年の上野の内国勸業博覧会において、小笠原産品が展示された。捕鯨業は衰退したものの、漁業は発展し、日本からの入植により人口は徐々に増加した。小笠原は植民地行政や亜熱帯農業の実験場として、それ以降の植民地政策に必要な知識をもたらし続けた。

→ I ③2漂流と漂流記、III ⑩植物、北海道②幕府の蝦夷地探検と北方図

〈参考〉Jonas Rüegg, "Mapping the Forgotten Colony: The Ogasawara Islands and the Tokugawa Pivot to the Pacific", *Cross-Currents*, 62 (2) ◇小花作助『小笠原要録』全6巻(写本、小笠原村教育委員会蔵) ◇平野満「文久年間の小笠原島開拓事業と本草学者たち」(『参考書誌研究』3巻49号) ◇田中弘之『幕末の小笠原』 ◇石原俊『近代日本と小笠原諸島』 (ヨナス・ルエグ)